

第5学年 社会科の実践

1. 単元名 「私たちの食生活と水産業」(全14時間 本時9時間目)

2. 単元目標

単元 目標

- ・ 小田原で行われている漁業を中心に調べ、水産業に従事する人々の工夫や努力を理解すると共に、水産業が加工や運輸などの仕事と密接にかかわっていること、水産資源や環境を守りながら漁業を進めていることに気づく。
- ・ 自分たちの町の水産業の現状とその問題点を捉え、市民として自分たちにどんなことができるのかを考えることができる。

3. 「ひびきあう三の丸の子どもたち」をめざすための工夫

研究課題・・・子どもが解決したい問題を持ち、友だちとひびき合いながら学習する子どもの育成

手だて・・・子どもの願いや思いの育ちを見とった単元構想と授業づくり

ブロックテーマ 「仲間への理解、自立する自分」

- ・ 仲間を理解しつつ、自分の思いも大切にする姿
- ・ 新しい価値観にふれ、自分を再構築する姿

<聴く・話すについての指導>

「聞く」については、静かに友達の話聞ける子が多い。しかし、まったく反応をしなかったり、温かい聞き方ができずに、雰囲気固い時がある。特に月曜日など、週初めにはそういう状態であることが多い。そうした現状を子どもたちと共有し、ルール作りを進めた。クラスの「話す」「聞く」のルールを、朝のおしゃべりタイムや学級会での話し合いの時など、振り返るようにしている。「話す」については、いまだに担任をみて話すもまだいる。相手意識や、声の大きさも個々によって様々で、まだまだ上手だとは言えない。安心して話せる雰囲気づくりをしているところである。以前は友達の話上手に聞けない子が、前の人が出たことと同様のことを言ってしまった時、「だから言ったじゃん。」「それいったよ。」と冷たく指摘していた場面もあったが、最近は「2回同じこと言っても大丈夫だよ。」「最後まで、言っているよ。」など受容的な雰囲気も少しでてきた。また、「小集団で」など緊張の少ない環境では、多くの子が話すことができる。集団の大きさが大きくなっても話せるよう練習中である。

<これまでの関わり合い・ひびき合い>

「どうしても解決したい」「みんなが正解を知らないから追究したい問題」などを扱った学習場面では、普段は控えめな子の参加意欲も高い。例えば、理科での「へその緒はいつできるか?」「卵膜はいつなくなるのか?」などがそうである。そういう意味で、これまでの中学年らしい「自分を表現したい」子どもたちから、一歩「大人になった」子どもたちへの成長を感じる。なるべくみんなが参加できるような問題を学習場面で設定し、話し合ったことが自分の考えや認識・感覚を構築することにつながるよう努力しているところである。

4. 単元と指導

<単元について>

日本は四方を海に囲まれ、古来より海の恵みを食生活に生かしてきた。最近では、日本食が無形文化遺産に指定されるなど、世界中から海産物を多く取り入れた健康的で、おいしい食事が注目され、海の恵みは今もなお日本人の毎日の食事に欠かせないものである。この海の恵みを確保し、毎日の食事を支えているのが我が国の水産業である。しかしながら、我が国の水産業は、200海里漁業水域の制定や、漁業従事者の高齢化、日本近海環境悪化、水産資源の枯渇など様々な問題を抱えている。未来の日本の食卓の豊かさも、この問題をいかに身近に感じ取り、一人ひとりが考えて毎日の生活に向き合うかにかかっており、本単元はそうした意識の素地を培う学習である。

特に、水産資源の確保については、漁具の発達や漁法が大きくその鍵を握っている。漁具が発達し、大型の漁船が開発された近年は、漁獲量が、自然に再生産される量を上回り、水産資源が枯渇する事態になっている。また、地球温暖化など様々な環境的变化によっても拍車がかかっているところである。さらに、漁業は自然を相手にした職業であり、雨や風、台風など、漁ができない時がある上に、とってみないと漁獲量はわからないという、不安定さがある。「とれない」うえに、「安定性がない」、つまり「稼げない」というところに後継者不足の原因がある。事実、小田原でもかつて漁獲量一位を誇ったブリも、今はそれほどとれなくなったり、若手のいない人材不足に悩んだ時期があったりなど、日本の水産業全体が抱える問題を経験している。

栽培漁業や養殖漁業などの「育てる漁業」は、「魚をとる」だけでなく「水産資源を守り、育てる」漁法であり、安定した漁獲量が確保できる。また、近年注目されているのは、実は定置網漁である。底引き網や巻き網などが、魚を追いかけて、そこにいる魚のほとんどを捕獲する能動的漁法であるのに対し、定置網漁は、自然に網に入ってくるのを待つ受動的な漁法である。海の汚れにつながる大量のエサや、船の燃料、排気ガスを生まない自然にやさしい漁法であるだけではない。網の目を潜り抜ける小さな稚魚は逃げていき、さらに、一度網に入った魚の7割から8割が網の外に逃げ、2割を確保するという、水産資源を守り、育てることが可能な漁法である。氷見で「世界定置網サミット」が開かれたことを契機として、海外にもそうした持続可能な漁法として広く推進され始めた。

小田原は、昔から定置網漁や刺し網を主体とした受動的な漁業を行っている。水産技術センターとの連携を図り、台風などにも耐えうる定置網を開発し、魚をとりすぎない網の目の大きさなどが考えられ、「漁の安定性」と「水産資源の確保」のバランスをとった漁業が展開されているのである。そうした工夫と努力が小田原の産業を支え、私たちの食卓を支えている。この小田原の水産業に着目することは、日本全体の水産業をみる視点につながるのに十分であり、この単元で扱う価値があると考えられる。

<指導について>

子どもたちは、早川漁港の近くに住んでいながらも、全く小田原の水産業について知らない。釣りをしたことがある子は7～8人だ。一人だけ、毎週末釣りに行く子以外は、みんな水産業は身近ではない。しかし、日記や日常のおしゃべりの中で、お寿司を食べたことを話題にする子は多くいた。そこで寿司ネタの実物の魚をあてるところから始めた。実物の魚を見て「大きい!」「こんなのどうやってつるんだろう?」など言葉にする子が多くいた。興味のある魚のとり方を調べ、楽しんだ後、「身近な小田原ではどんなとり方なのか?」と、次第に小田原の水産業に迫ってきた。特に、漁師さんである鈴木さんとの出会いを通し、自然を相手にした厳しい労働環境の中で、漁師の喜びである大漁を目指して工夫や努力を重ねて漁に出る生き方に触れさせたい。そして、大漁を目指しながらも、刺し網は禁漁期間を守り、網の数を制限している。定置網漁は自然に網に入ってきた魚を受け入れ、7割逃げ、残った2割で漁を続けている。その意味を考えることで、「守り」「育てていく」大切さに気付かせたい。そして、漁師さんが大切にしている一匹、苦労してとっている一匹を大事にする子どもたちになってほしい。

ここでの問題は「なぜ定置網で魚をとるのか?」である。水産試験場で、「網に入った魚の70%はにげる。」「箱網にはいった魚だけをとる。」と聞いた子たちの驚きは隠せない。試験場に行った後の感想交流の後半は「70%逃げてしまうから定置網は難しいなと思いました。」「どうして箱網の魚しかとらないのかな?」「ほかの漁法もあるのになんで定置網なの?」と疑問が飛び交った。刺し網の漁師さんに会ったときに、「刺し網は活魚がとれる。」「伊勢海老やヒラメ、サザエなどの高級魚を生きたまま高く売れる。」など刺し網漁についてのよさを聞いたものの、定置網漁のよさは確認できないままに終わっている。漁師としては「大漁を願って」おり、安定した収入を得にくい状況で、ますます「なぜもっととれる漁をしないのか?」疑問は深まっていった。

「なぜ定置網なのか」を考える手がかりとして、「定置網のよさを」考えるようにさせた。自分たちが調べてきた漁法と比べたり、さらに水産試験場での知った知識をいかしたりすることが、足場になるからだ。そのためにも、その時の板書なども印象に残るように構造化し、さらに掲示物に残すようにする。一人では少ししか見えない「定置網のよさ」を、みんなで考えを出し合うことで、自分とは異なる新しい価値観に出会い自分なりに「定置網漁」に対する見方を構築していくことができる。そうした姿をひびき合いの姿とした。また、刺し網の漁師さんの話の中の「不必要な魚は逃がす。」「禁漁期間の魚は逃がす」といった命を大事にする姿勢や、毎日「新鮮な魚を食べさせてあげたい」と願い魚をとり続けていることなどに気づけるよう、立ち止まる場面を作っていく。そうすることで、「70%逃げてしまう。」から「70%逃がしている。」、持続可能な定置網漁の良さがみえてくるようにしていった。

5. 単元構想 「私たちの食生活と水産業」単元構想 (全14時間: 本時時8間目)

★単元目標

1. 小田原で行われている漁業を中心に調べ、水産業に従事する人々の工夫や努力を理解すると共に、水産業が加工や運輸などの仕事と密接にかかわっていること、水産資源や環境を守りながら漁業を進めていることに気づく。
2. 自分たちの町の水産業の現状とその問題点を捉え、市民として自分たちにどんなことができるのかを考えることができる。

普段のおしゃべりタイム
好きなすしネタから

すしネタの本物の姿をあてよう①

魚を釣るイメージを持つために、実物大に近いものを提示していく。

「まぐろ、でか!」「たこだ。」「シラス小さいね。」「イセエビ高いんだよね。」「アワビだ!」「アジ」「サーモンすきなんだ。」「ぼくはあんまり好きじゃないな。」「サバだ。しめさばが好き。」「ブリって大きいね。」「大きさが名前変わるんだよ。」「大きいね。」「カツオ。」「この間僕が釣ったカワ...

生で食べられる新鮮な魚を食べるまでを整理しよう



「いつごろ魚が届くのかな。」
「魚を捕ってから届くまでにどれくらいなのかな。」
「店で切って出すのかな。」
「凍った状態で届くのかな?」

「だれが魚の値段をきめているのかな。」
「店の人が買いに来るのかな。」
「個人でも買えるのかな。」
「だれとだれが取引するのかな。」
「どうやって値段がきまるのかな。」
「どのくらい魚が届くのかな。」

「いつ魚を捕るのかな。」
「魚を捕ったら仕事は終わるのかな。」
「小田原の漁師は何人いるのかな。」
「釣った魚全部市場に出すのかな。」
「雨の日は船を出すのかな。」
「余ったらどうするの?」
「休みはあるのかな?」

「どうやって魚をとるんだろう。」「どこでとれるのかな?」「どんな道具で釣ってるのかな。」
「何人くらいでとるんだろう。」「どんな船でとるのかな。」
「一回に何匹くらい釣れるのかな。」
「魚によって取り方がちがうのかな。」

とり方の疑問が一番多いね。
とり方から調べてみよう。

魚をどうやってとっているのか調べよう②③

教室に資料コーナーなどを設ける。自分が調べたい魚を決め、その魚のとり方を調べるようにする。

棒受け網漁 <さんまなど> 光に集まる魚を網に集めてとる。	刺し網漁 <カワハギなど> 網を海の底にはり、そこを通った魚がひっかかる。	底引き網漁 <カレイなど> 海の底に住んでいる魚を網で引いてとる方法。	定置網漁 <ブリなど> 魚の通り道に網をはり、魚が入ってくるのを待つ方法。	巻き網漁 <アジ・サバなど> 餌をまき、集まってきた魚の群れを網で取り囲みとる方法。	はえ縄漁 <マグロなど> 枝縄に餌をつけて何本もたらし、餌を食べた魚を引き上げる。	一本釣り <カツオなど> 大きな船の上で、餌をつけた釣竿で一匹筒とる方法。
--	--	--	--	---	--	--

ポスターにし、発表しあう。一人ひとりノートに調べ、調べたことが同じ人同士で集まって、ポスターを仕上げる。

資料を読み、調べたい魚の漁法をノートにまとめることができる(技)

ポスターセッションを受けて感想交流
 「いろいろなとり方があるね。」「魚の特徴に合わせてとっていることが分かった。」「同じ種類の魚でも、取り方が違うこともある。」「魚の特徴に合わせてとっている。」「こんなにとり方に種類があると思わなかった。」「一本釣りは大変そう。」「一本釣りやってみたい。」「小田原はどの方法でとっているのかな?」「船がいっぱいあったよ。」「巻き網かな?」「小田原はアジが有名だから巻き網じゃない?」「定置網じゃない?カジキとかもとれているのみたよ。」「みたことない。」「一本釣りだと思う。船がいっぱいあったし。」

小田原の漁師さんはどの方法で魚をとっているのか

「小田原漁港に見に行ってみよう。」「漁港の人に聞けば分かる。」「でも定置網だったら、しずんでいるんじゃない?」「漁している所は見れるのかな。」「朝早いんじゃない?」「定置網だけでもみれるかな。」

相模湾試験場の情報提示。

小田原漁港と水産試験場に行ってみよう。④⑤

発表の中に出てきた言葉の確認
 *遠洋・沖合・沿岸漁業
 *海流(黒潮・親潮・対馬・リマン)
 *大陸だな *潮目

小田原の事が話題にならなければ、教師から話題にあげる。また、釣りが好きな児童を中心に、「自分が漁師なら〜。」という観点で小田原で行われている漁を予想する。

<小田原の漁法について>

- ・早川は定置網と刺し網ととれる深さが決まっている。
- ・水産試験場では網の開発を続けている。
- ・米神に配置され、沿岸漁業である。
- ・入った魚の70%にあげる。
- ・箱網に入った魚だけをとり。→引き上げてすくう。
- ・垣網にぶつかり、本能的に深いほうへ行く習性を生かしている。
- ・昔はもっと網がシンプルで、魚が逃げていた。
- ・昔は手で引き揚げていたが、今は機械。
- ・昔は一つの船に50人から60人。今は少なくとも4人。
- ・さし網は、ヒラメやいせえび。
- ・イセエビは5月から12月は禁漁。
- ・刺し網はえらやとげが。網にひっかかってとれる。

<相模湾について>

- ・水深1000mの深いところがある。
- ・親潮の流れが海底に流れ込み、栄養分が豊富にふくまれている。
- ・黒潮ののって魚がたくさんくる。
- ・山からミネラルを含んだ水が海に流れ込む。
- ・だからいろいろな魚が捕れる。

<定置網がこわれると>

- ・切れると1か月りょうができない。
- ・年間2億円稼いでいるが、定置網が全部壊れると4億円から5億円かかる。
- ・全部壊れると半年漁ができない。
- ・給料が出せなくなって、漁師がやめていくこともあった。台風や波が大変。

「いろんな種類の魚が取れる相模湾はすごい。」「定置網は思ったよりすごく大きいものだった。」「ロープ一本がすごく太くて重いから、漁師さんは力持ち。」「最後の網までくることがすごい。定置網で取っているところが見てみたい。」「網を引き揚げるのは大変そう。」「実際の漁師さんはいつ引き揚げているんだろう。」「朝早いんじゃないかな。漁師さんの一日ってどんなのだろう。自然に左右されて大変だから漁師も少ないのかな。小田原に何人くらい漁師さんがいるんだろう?」「それにしても70%も逃げているから定置網は難しいな。」「なんで箱網のしかとらないんだろう。」「他のとり方にしないのかな。」

漁師さんはどんなふうに使っているだろう?

漁師さんについての感想や疑問がたくさんだね。漁師さんについて聞いてみよう。

漁師さんはどんな風に仕事をしているだろう？⑦⑧

(刺し網漁師 S さん 水産海浜課 O さん)

<p><漁師の仕事と生活> 朝は、2時くらいに起きて、3時に船でする。5時くらいに魚を陸にあげ、魚を分類し、箱に詰める。8時から10時は網の修理をしたり、くっついたものを取ったりする、雨と風が強い日と魚市場が休みの日は休み。夕方網を仕掛けに行</p>	<p><漁師の楽しさ> やっぱりたくさん取れたときは楽しい。自分が考えた場所で、取りたい魚が取れた時が一番うれしい。</p>	<p><漁師の苦労> 魚が取れないとつらい。また、台風や大雨、風が強いなど、漁ができない日が多くなると困ってしまう。また、風や波が強い日の漁は、とても危険で体力的にもつらい。</p>	<p><取れた魚> 刺し網は生きたままの魚が取れる。また、あまり必要じゃない魚や禁止されている魚は、その場ですぐに海に帰す。</p>
--	---	--	---

なぜ定置網で魚をとるのだろうか？

(本時) ⑨

「漁師さんの生活って大変だ」「漁師さんて朝朝早早いあんまり寝ていられないから大変」「どげんか別の給料がもらえるのかな」「網のメンテナンスを自分でできずには網を仕掛けられないんか」「それは、夜はヒラメやササギを動かしながら歩いてたよ」「そりゃなんなん」「もっと早く仕掛けをあげれば、もっととれそうなの」「定置網はメンテナンスの後、箱網をおすすめしよ」「でも、箱網に入っただけじゃなくって、もっと捕れればいいの」「漁師さんの仕事は大変だから、もっと捕ったほうがいいの」「70%セメントもいける定置網の手法をなんで継続しているんか」「いや、やっぱりみんな考えてない」「ほかの取り方もいっぱいあるの」「どうして定置網なのかな」

<p>(一度にいろいろな種類魚がとれる) 季節によっていろいろな魚が捕れて、旬の魚を売ることができる。たくさん種類を売るのがお客さんもきてくれ</p>	<p>(船のガソリン代が少なくてすむ) 魚を探したり、船で網を引いたりしないでいいから、ガソリン代は少なくてすむんじゃないかな。</p>	<p>(一度にたくさん取れる) 魚が一つひとつの釣竿よりもいっぱいとれるし、大きい網だから、たくさんとれる。</p>	<p>(魚が傷つかないから) 刺し網と同じように、魚が傷つきにくいと思う。一本釣りとかだったら、針がささるところから血が出たりして、魚の値段が下がってしまう。</p>
<p>(昔から定置網をやってきたから) 昔からやってきた方法をかえるのも大変だし、すぐお金がかかるから。</p>	<p>「たくさん定置網のいいところがあるね。」「昔からだけど、たくさんとりたければ方法を変えればいいのかうかな。」「でも、70%は逃がしすぎでしょ。」「もっと儲かったほうがいいよ。」「魚が余ったら売れないから、売れる分だけとってるんじゃない?」「鈴木さんも余らないようにしているっていった。」「あとは逃げたほうが、魚が死ななくてすむ。」「逃がせば、次の日とか、ほかの日にとれるから、ずっと魚がとれるよ。」</p>	<p>(70%逃がしてずっと漁を続けられるようにして) 鈴木さんもとっちゃいけない魚を逃がしたりしていたけど、漁師さんにとって魚は大切だから、取りすぎて減ったりするのは困ると思う。</p>	<p>(70%逃げても必要な分はとれている) 逃げて、売れる分は捕れているんじゃないかな。余ったら、もったいないし。</p>

定置網が続けられている理由を多面的に考え、よさを感じられるようにするために、必ずしも正解が一つ出ないことを示唆する。

必要な分が、増えたら魚をもっととるのか? 逃がすのか逃がしているのか焦点化をはかる。そこで、定置網漁のよさである水産資源の確保の視点を生んでいきたい。

漁港に行って定置網漁を続けるわけを聞こう⑩⑪⑫

<早川漁港にて> 水産海浜課 尾幡さんの話

<p><定置網が行われる訳> ・一番に言えるのは地形が定置網にあっているということ。魚が岸に沿って泳ぐので、湾内に網を張っている。 ・今は、地球温暖化など、環境が以前に比べ変わってきている。魚が減っていることもあるし、魚のことを考えて漁をしたり、生活したりすることが大切。 ・一部の人は、魚がぐるよう海にミネラルの含まれた水を送るために、森林づくりなども行っている。 ・貴重な水産資源を守るために禁漁期間を設けたり、稚魚の放流もしている。 ・定置網の垣網の目の大きさなども小さい魚稚魚は通り抜けられるように工夫されている。</p>	<p><魚の値段について> セリのビデオ 卸業者の人がセリで値段を決めている。お客さんが買ってこれそうな値段で取引され、毎朝早くに行われる。鮮魚と、加工品と、他の漁港からの魚と3つに分かれて行われている。小田原の魚がおいしいということがわかれば値段も高く。そのために「城前魚」の取り組みも行っている。29年度には、加工場も建設予定。</p>	<p><魚市場のながれについて> とれたての魚は、この機械で分類される。氷温の液体につけて魚を消毒している。新鮮なまま運ぶために、保冷トラックなど様々な工夫がある。</p>
--	---	---

「魚を大切に漁をしているんだね。」「工夫や苦勞をしてとった魚は大事にたべたいな。せっかくとったものは残さないで食べるようにしたい。」「魚が減らないようにするには森林を壊さないことも大切なんだね。」「私たちが何かできることしたいな。」「小田原の魚が余らないで売れるようにしたいな。海や川のごみも困らしい。」「城前魚としての取り組みはまだあんまり知られていないね。城前魚を広めたいな。」

さまざまな工夫や努力によって、水産資源を豊かに保つことで、安定した消費が可能になっていることを理解する。(理解)

セリの仕組み、新鮮なまま早く店に届けるまでの配送の仕組みを理解する。(理解)

私たちにできることはなにか⑬⑭

<p>(海をきれいにしたい) 海岸に行ってプラスチックごみを拾ったり、海岸に来た人にごみを捨てないように呼びかけたい。</p>	<p>(森林の手入れをしたい) 実際に上流の山に出かけて、森の様子を見てみたい。ミネラルを含んだ水が流れるようにしたい。</p>	<p>(小田原の魚のおいしさを伝えたい) 魚の栄養や、小田原の海で育った魚のおいしさを知らせて、魚が売れるように伝えたい。</p>	<p>(稚魚を育てて放流したい) 稚魚を育てて放流すれば、少しは帰ってくるかも。育てることもやれば、魚が減らなくてすむと思う。</p>
---	--	---	---

(漁師さんのとった大切な魚だと伝えたい)
こんなに苦勞してとっているんだよ。大切に食べていかないと、いなくなってしまうことを伝えたい。

6. 本時展開

学□習□活□動□	主な支援・留意点【評価】
<p>□□70%逃げる・箱網しかとらない・壊れたら大変・他の漁もあるのに・・・</p> <p>70%も逃げるのになぜ定置網で魚をとるのか？</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>いろいろな魚がとれる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな種類 ・変わった魚 ・旬の魚 ・ふだん食べる魚 ・小田原で有名な魚 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>一回でたくさんとれる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・群れで入ってくる ・箱網は大きいから1回でたくさんとれる </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>短時間でとれる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・沿岸でとっているから近いから ・カサシも少なくて済む </div> </div> <p>魚を海に過ぎなくてよい ＝とりすぎない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とりすぎないはえしている ・余ったらもったいない ・とりすぎるとへってしまう⇒□へらない <p>30%で足りている</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2億円も儲かっている ・結構とれている ・30%で十分 <p>いつも足りているわけではない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とれない日もある ・とれる日で十分ということではない ・とれない日は30%では足りない ・もっととりたい日もあるはず <p>刺し網でも「過ぎ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・刺し網でも伊勢海老とか禁漁期間があった ・食べられなくなってしまう <p>いつまでも食べられるようにしている</p> <p>友達の意見を聞いて、自分の考えや、いいなと思った考えなどをノートに書こう</p>	<p>●□自分が持っている意見や考えを交流する。言いやすい雰囲気を作るために、相田指名等も取り入れる。</p> <p>●→互いの考えで分かりにくいところは、聞きあったり、互いにフォローしたりしあえるよう促す。</p> <p>●→意見が出た後で、友達の見解と同じことを考えた子が表現できるようにする。そうすることで、理由の幅が広がると考えられる。</p> <p>●→一通り出し終えたところで、「これは違うのではないかな？」という意見を出していく。「30%で足りているのか」という補足が望むことで、30%の意味や魚の不安定性に気づき、漁師の「本当はもっととりたい日」があるという思いが伝わるようにする。</p> <p>●→「魚を海にかえさなくてよい」という意見についてどういう意味なのかを本人に語らせようで、とらえやすい言葉に置き換え板書する。</p> <p>●→「とりすぎない」ということが「海の生き物をへらさない」ということにつながるように、鈴木さんの話から分かったことにもとどる場面をつくる。</p> <p>◇友達の考えを理解し、その内容を吟味し、「定置網漁のよさ」について自分の考えをもつことができたか。</p> <p style="text-align: right;">【関心意欲態度】</p> <p>◇他の漁法と比較したり、漁師さんや水産庁職員の方の話をもとにしたしなから、「定置網漁のよさ」を考えることができたか。</p> <p style="text-align: right;">【思考・判断】</p>

7. 実践をおえて

(1) 本時に至るまでの経過

子どもたちは、魚をどうやって捕るのかを調べていくうちに、魚を「釣る」と言っていた子どもたちが魚を「捕る」に変わっていった。一匹一匹釣っている一本釣り以外は、一度にたくさんを捕るために工夫が凝らされていたからだ。一通り調べ終わった後、「小田原の海はどの漁法なのか。」と教師の方から問いかけた。近い海を毎日見ながらも、漁をする海としては見たことも想像したこともなかったのであろう。しかし、身近であるがゆえに、「そういえば見たことないが、どれだろう？」と、疑問は子どもの物になっていった。みなとまつりなどに出かけたことのある子や、海に遊びに行っている子などは、「地引き網はスペースがない。」などと予想を繰り返して語り合い、「港に見に行ってみよう。」「船しか見えないよ。」と自然に実際に目で見て確かめに行きたいという声があがった。

そこで出会ったのが、相模湾試験場である。相模湾試験場で、定置網の模型や強度、小田原で昔から続けられている漁の写真、捕れる魚の種類などが詳しく説明された。短い時間であったが、とても充実しており、興味深げに見たり聞いたりしていたが、事後の感想や疑問の中から次の二つに注目し、次の活動へと入っていった。「定置網がかなり大きく、それを操作する漁師はかなり力が必要であるが、いつ、どんなふうに捕っているのか。」「小田原でなぜ定置網漁なのか。」ということであった。

一つ目の「漁師はかなり力が必要であるが、いつ、どんなふうに捕っているのか。」というのは、実際に壊れた定置網の一部を持たせてもらったことがきっかけだった。実際にもってみると、3人でやっと一本持てるくらい重く、それにつながれている定置網がとても大きいことはそれだけでも容易に想像できた。そこから、力持ちの漁師さんに会って、どんなふうに引き上げているのか？仕事はどんな様子なのかを聞いてみるようになった。

実際に教室に漁師の方に来ていただき、いろいろな質問をした。「朝3時くらいから起きて準備し、漁に出ること」「刺し網は伊勢エビやカワハギなどの高級な魚を捕っていること」「禁漁期間がある物は途中で逃がしていること」など、生活から仕事の内容の細かなところまで、答えていただいた。時間いっぱいまで話が途絶えることなく、さらに出てきた疑問は後に電話で問い合わせるなど、子どもたちはますます興味を持っていった。

二つ目の疑問は、「なぜ定置網漁なのか？」である。相模湾試験場で、実際の網の目の大きさや仕組みを聞き、大きい網の目からたくさん的小魚が逃げている、さらに、網の口は開いているので自由に入出入りできて網に入った魚の70%が自然に逃げていると聞いた。積極的なトロール漁法や延縄漁法を調べた子どもたちには、このことが何となく消極的な捕り方のような気がしたはずである。「たくさん逃げるのになぜ定置網なのか？」などの疑問が再び子どもたちの問題となり、様々な予想をつぶやきながら「一人では解決できない」「わからない」共通の疑問となっていった。

(2) 本時での様子

本時では、それぞれに「なぜ定置網なのか？」について予想したことを出し合った。全く予想もつかないことだったが、これまでの学習事項や見学を通して分かったこと、漁師さんから聞いて分かったことを足場に、予想を持って本時に臨んだ。友だちがどんな予想をしているのか、交流しなければ、それで良いのかが本当に分からないのである。しかし出してみると、たくさんの予想がだされ、予想の交流から「そんな風に考えたのか。」「すごい。」などと反応の声が上がった。しかし、ただ一人の「70%逃げてもそれで十分とれているから。」という意見で、子どもたちは固まった。「30%で十分かどうか。」が具体的にどう捉えて良いか分からなかったからである。私は、当初よりここを教師の出どころとして考えていた。「魚を逃がすこと」＝「未来に持続可能な漁法」として深まるきっかけになると思ったからである。だからこそ、「全体量がどれほどで、それに対する割合とは・・・」という量をつかませることに時間を割くより、「今とれている量で十分なのかな？」と切り返していき、「とりたい量」ではなく「捕るべき量」に気づいていければよいと思っていた。しかし、教師がいくら切り返しても、初めて「あえて捕らないこと」と出会った子どもたちは、立ち止まるばかりであった。「漁師にとって大漁が一番であり、とれることが当たり前嬉しいことである。」と考えていた子どもたちには、「30%で十分なはずがない。」という思いになりながらも、「定置網がいいからこそ続いているに違いない。」という気持ちとの間で揺れ、子どもたちは考え込んで行く様子だった。そこで終了のチャイムが鳴った。

(3) 授業後の様子

本時直後、Aさんが「魚を逃がす事っていいことなの？悪いことなの？」と聞いてきた。子どもたちの揺れをずばり言い当てた言葉だったと思う。次時はその言葉から授業をスタートさせた。子どもたちは盛んに、「逃がすなんて漁師にとっては悪いことだ。」と論じる多数派に対し、少数派の「捕らないこともいいことだ。」という意見が展開された。その議論の後半、Uさんが「取り過ぎて魚が減るなんて事あるのかな？」とつぶやいた。そこで、準備していた小田原のブリの漁獲量のグラフを提示し、読み取り、ブリが捕れなくなった原因の一つに乱獲があることを理解した。「何とか、ブリや魚を呼び戻したい。」「もっと昔みたいに捕れるようになってほしい。」と感想を述べる子が多くいた。しかし、さらに、魚の消費量の低下に伴い、ますます漁業が人の生業として成立していく事が難しくなっている現状に出会った。海の魚を守るためには、自然に優しい漁をすると共に、私たち自身が魚を食べ、海を守る気持ちを持つことが大事であることまで学習することが出来た。

(4) 単元を通しての成果と課題

こんなに海に近いのに、あまり水産業とのつながりをもたない子どもたちであったが、実際に出かけ、いろいろな人と出会いながら、漁業を徐々に身近な物にしていくことができた。追究がさらに次の追究へとつながり、問題解決のスパイラルが続いていながら学習が続いていった。学習を続けるにしたがって子どもたちの行動や考え方にも変化が出てきたのを感じる事が出来た。給食では、和食では残飯が出がちであったが、魚をのこさないように声をかけたり、魚がとれる小田原の海を守る活動がしたい、と総合学習へと発展していったりした。子どもたちが海や食卓にのぼる魚を見なおしながら、自分の生活に関わった学習が出来たことは大きな成果だったと思う。

授業では、考え込んでしーんとしたり、新しい物と出会って固まったり、話がスムーズに進まず錯綜したりする場面も多くあった。本時では、こちらの見取りの甘さと、子どもたちのモヤモヤを明確にする言葉を教師の出どころとして適切に投げかけられなかったことが残念であったが、今後は、出どころでどんな働きかけをするか、もっと周到に何通りも予想しながら言葉や資料を準備したい。また、そんな場面も、もちろん問題解決には必要な場面であることを十分知りながら、困って考え込んだ子どもたち自身が、「言葉をどうつなぐか」、「何を突破口に問題を乗り越えていくべきか」を考える時もあるとよいと考える。そのための足場を教師がつくるべきで、さらにしっかりと足場をつくるために、深い教材研究ができるように自分の力をさらに高めていきたい。